

繪本三國妖婦傳

中編

五

~ 13

2892

10



へ 13  
2892  
巻 10

繪本三國妖婦傳中編卷之五

目錄

藤女ふじのむすめに因よて行綱ゆきづな因よ顧かへりと賜たま女むすめ 小町こまち以下いげの女房むすめ款かへり道みち名な譽うた

小野おの小町こまち神かみ泉いづみ苑えん小こて雪ゆきの圖ずみ

小式部こしきぶの内侍うちわらわ詠歌えいかの圖ずみ

紫式部むらさきしきぶ石山寺いしやまのてら茶籠ちやろうの圖ずみ

昭  
和  
三  
九  
年  
三  
月  
末

赤深右衛門住吉明神、欽と捧る圖

高陽殿に深女より光を放、安倍泰親易道也

高陽殿内宴の圖

鳥羽院玉深女、深女、の圖

安倍泰親、清徳と占ふ圖

繪本三國女系傳中篇卷之五

深女、行綱、恩願、賜、長、時、下の女房、秘道、の結

御人五十三代、堀河院の清守、勅免、あつて、朝廷に、奉官、小、護、  
北面の侍従五位下左衛門尉、坂部、行綱、天恩、以、か、下、なり

忠勤、他、事、を、く、勵、ま、り、ま、上、内、左、衛、門、尉、二十一年、中、七、嘉、永、二、丁、亥

年七月十九日、御宝、等、二十歳、中、崩、御、あり、同年、十二月初日

皇太子、宗、仁、親、王、御、任、つ、つ、を、あ、り、鳥、羽、院、是、也、御、母、八、咫、大、政

大臣、寧、子、公、乃、息、女、清、深、を、茂、子、と、稱、を、翌、年、改、元、あ、り、と

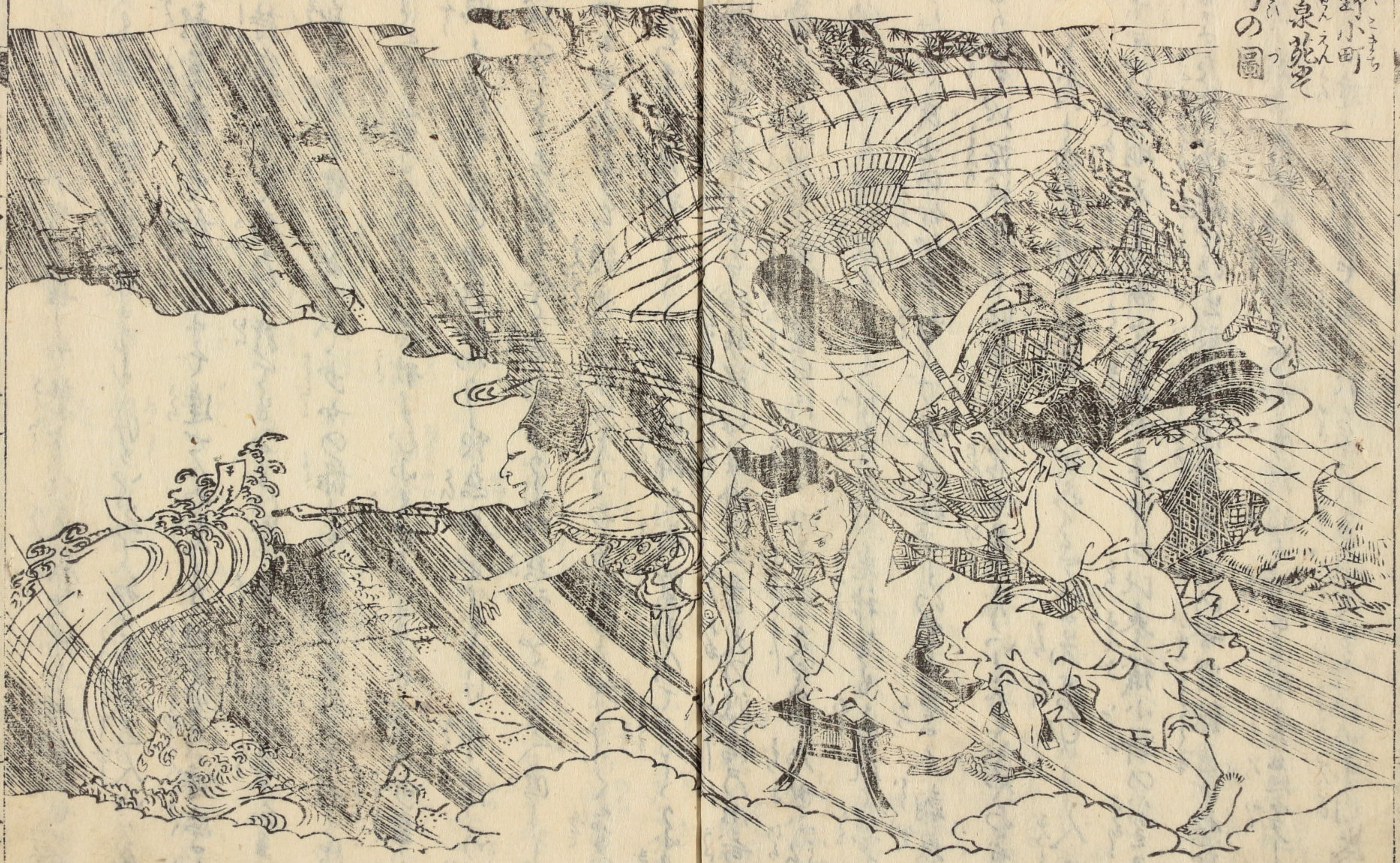
七十、四、代、鳥、羽、院、の、天、仁、元、戊、子、年、と、い、當、今、の、御、代、も、あ、り、と、い、面

被、勅、一、階、被、さ、り、は、右、邊、將、監、と、稱、行、せ、り、行、綱、之、妻、也、下

の友人殿とさういふあつたさういふ殿意にうまひをうたふ切あつたこと  
 とも先帝の御代は娘の藤ゆへにさき官女となり今も成長  
 中一宮親元は勝を聰明英智あつたけり孫の外殿意  
 小ついで此由は又御綱もかき昇進せしことやうなるもの  
 元来二年の春御綱を牙すり相ついで其母も牙すり藤  
 孫とあつていふ不便とさういふあつた藤大内はこれ  
 ぐらゐり先帝より徳家へりある和歌の西歌は人と業  
 あやしとせ藤加が中へは影すけし秀逸は徳を御  
 褒賞よりつて天擡るなりおりの勅令紙書り足の勅紙を  
 もゆきせしれは是令し和歌の徳より不されば和歌の尊  
 風俗ゆへに神代中々伊妹孫伊妹丹の二つ天の浮橋乃水音尺  
 檜書一素書鳥命八雲の侍御より三十一文字の乃世不  
 天神地祇も感念すしく目小又ぬ鬼神をもあはれ思ふ  
 せしけり武士の心を和らげ手は徳よりつて厚く朝恩  
 ありきり御綱の御けり世官女昔よりいづくもあはれ  
 舞少くふいふわらびうに其一二とあつた人先其ひ一人  
 又十四代仁明天皇の御宇兼和年中の比參議小野の曾孫乃  
 養子たむの依從は位出羽朝日小辨良実の女宮親元とわら  
 少智元は秀で幼少ゆへ和音紙好む御は秀逸多しと  
 殿御は達しりふと殿上にも入る御又御侍の系は

の友人殿とさういふあつたさういふ殿意にうまひをうたふ切あつたこと  
 とも先帝の御代は娘の藤ゆへにさき官女となり今も成長  
 中一宮親元は勝を聰明英智あつたけり孫の外殿意  
 小ついで此由は又御綱もかき昇進せしことやうなるもの  
 元来二年の春御綱を牙すり相ついで其母も牙すり藤  
 孫とあつていふ不便とさういふあつた藤大内はこれ  
 ぐらゐり先帝より徳家へりある和歌の西歌は人と業  
 あやしとせ藤加が中へは影すけし秀逸は徳を御  
 褒賞よりつて天擡るなりおりの勅令紙書り足の勅紙を  
 もゆきせしれは是令し和歌の徳より不されば和歌の尊  
 風俗ゆへに神代中々伊妹孫伊妹丹の二つ天の浮橋乃水音尺  
 檜書一素書鳥命八雲の侍御より三十一文字の乃世不  
 天神地祇も感念すしく目小又ぬ鬼神をもあはれ思ふ  
 せしけり武士の心を和らげ手は徳よりつて厚く朝恩  
 ありきり御綱の御けり世官女昔よりいづくもあはれ  
 舞少くふいふわらびうに其一二とあつた人先其ひ一人  
 又十四代仁明天皇の御宇兼和年中の比參議小野の曾孫乃  
 養子たむの依從は位出羽朝日小辨良実の女宮親元とわら  
 少智元は秀で幼少ゆへ和音紙好む御は秀逸多しと  
 殿御は達しりふと殿上にも入る御又御侍の系は

小野小町  
神泉苑  
雲の圖



三國妖婦傳中巻之五

三國妖婦傳中巻之五

三

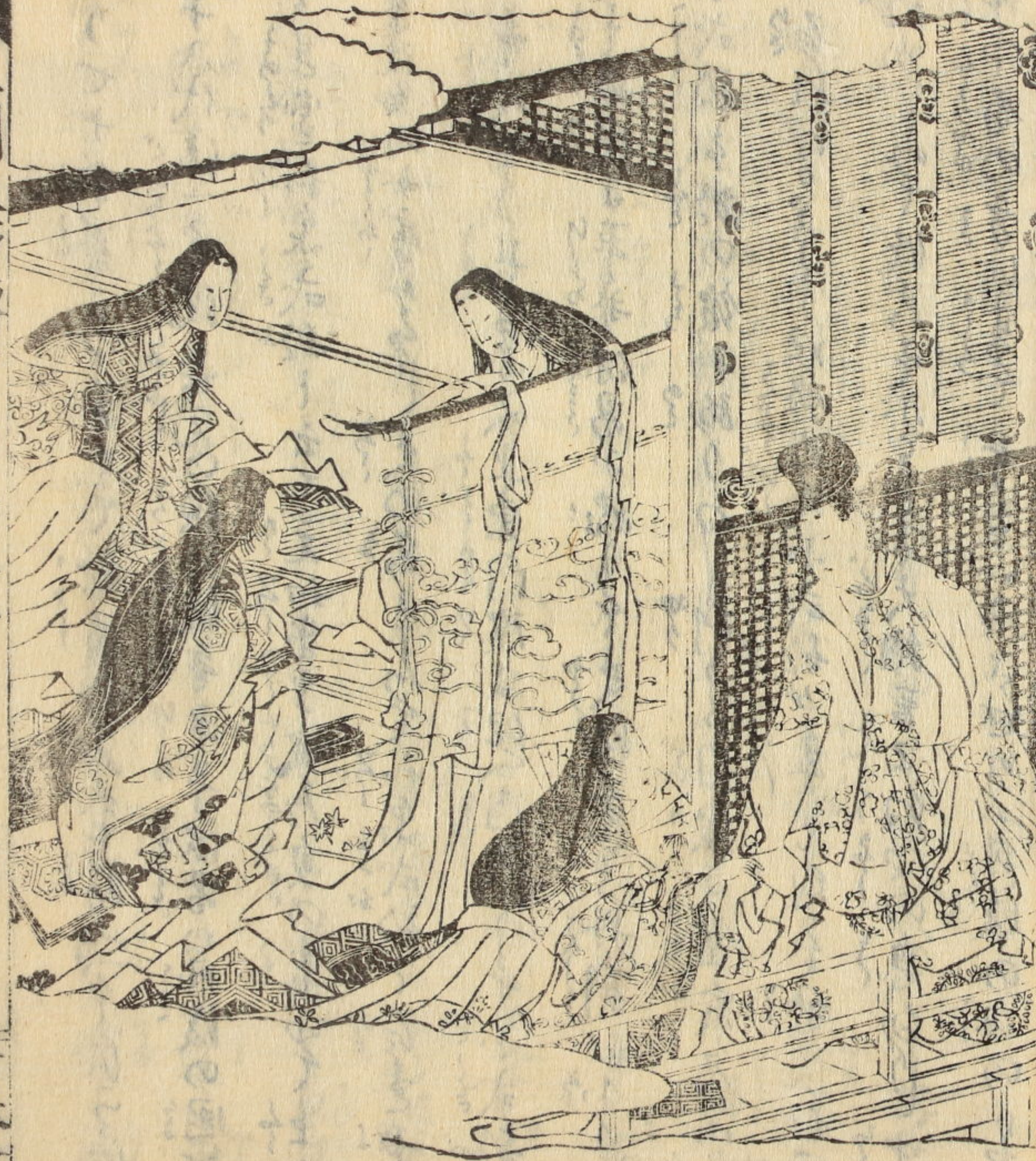
三

詔ありて小町を具して禁中に天顔を見し時、帝も其美貌を感感ましくけり。つゞくある若殿上人いり、  
 帝も其美貌を感感ましくけり。つゞくある若殿上人いり、  
 容態良藤とて和歌の中て達せんやえり。祖父曾孫の事多  
 持文巧中て和歌及於てもあはび。世に傳へ孫の事多  
 自身の秀一歌とて少女の縁と披露あはふをわく。源や  
 ありとも家よりあはひて歌もいふまじ。七歳の少年意  
 の情もは知はし。世にひびく。た恋身をまかけ。吊席乃也  
 秋成のどちあはれんと思ひも。ぬ恋歌をわく。此一紙  
 乞ふがきもあはれ。経丹成りてわらふも。心く。年紙  
 際とらま。他と歌とて。出さけ。体を感感わけて。きく。不吟

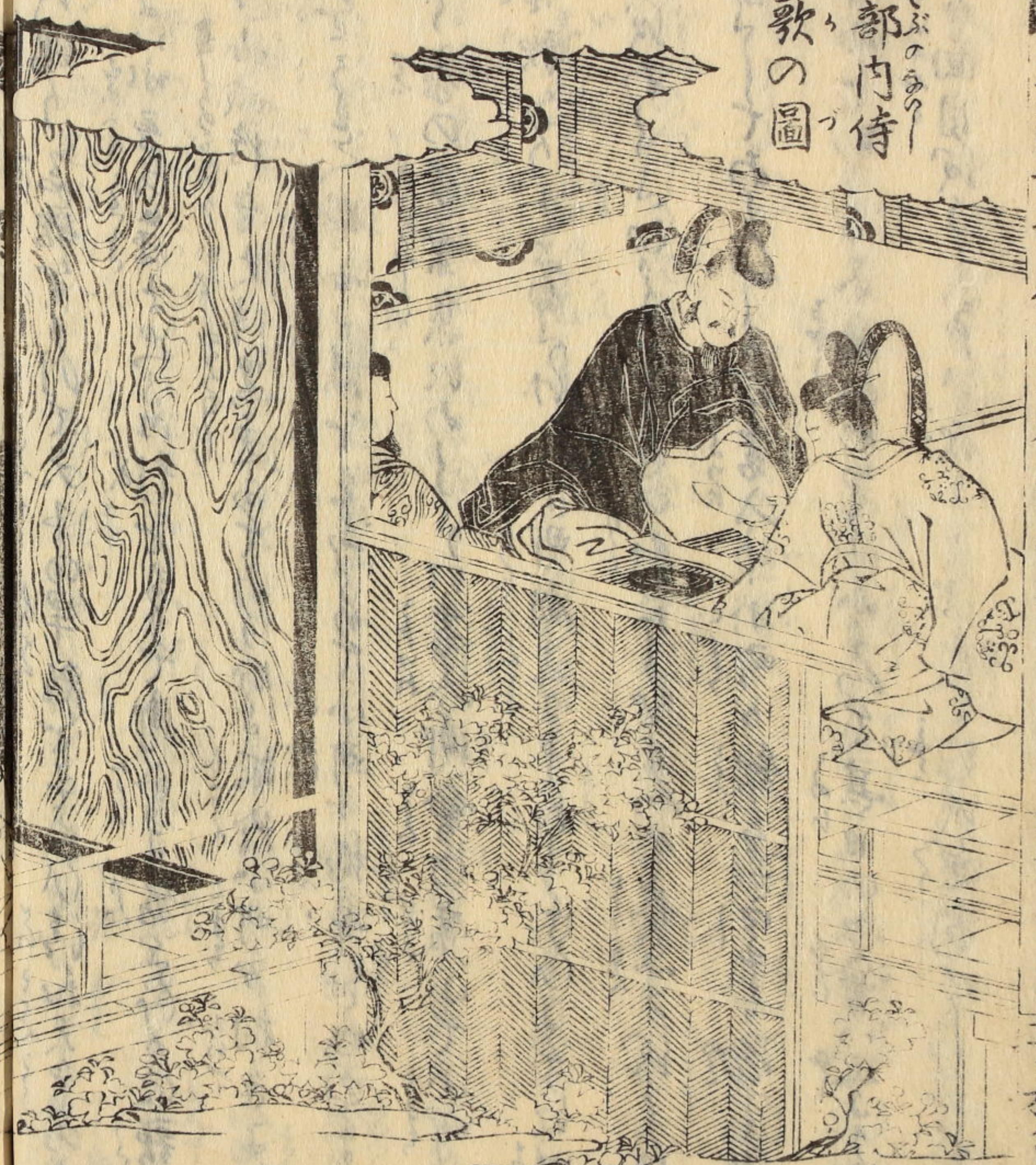
世と詔は畏んで大納言源融卿仕うけ歌もふ。まは吟じ  
 ろく。帝御感あはれ。次あつて。是を皇孫なり。成長の後こそ  
 おりし。やうくと仰く。孫美す。く。以後の當所の。會ふ。と  
 よ。し。家女。よ。う。と。い。は。し。は。願。く。て。山科の。を。し。め。り。家女小町  
 と。ある。系。右。大臣。源。常。公。と。て。勅。令。あり。け。り。ふ。を。皇。面。目。紙  
 わ。い。と。退。出。す。と。後。又。朝。よ。め。され。所。勅。渡。り。け。り。小。町。と。い  
 皇子の中へ配さる。一年はあ。ま。ま。で。皇。女。切。は。其。皇。女。と。い  
 誠。に。眞。加。小。町。と。い。は。し。合。車。と。ま。あ。り。て。朝。を。送。り。り。と。配。偶。わ  
 け。んと。敬。愛。より。け。り。な。ま。ひ。親。を。も。惟。喬。あ。て。を。ま。せ。り。と。あ  
 是。より。小。町。小。町。と。い。は。し。け。り。幼。少。ふ。く。な。り。と。加。祥。三。庚。年

三月廿八日仁明帝御宝篋四十一めて崩すといはれり二年文徳  
 天皇仁壽二年申年十二月廿二日小野篁も逝をわけて高令文徳  
 天皇の法字は小町の父良實の位階をりつて娘を親王に配是  
 と叶ふびおのづゝ先帝の敵者も等用になりけり後小町は世  
 中もいふ事なく思ひ是より去りしめわれをも見ぞつまれくそ  
 わりけり惟喬親王もあれは同く小町の外も世の人よりわさせよ  
 とありともや後貞親十に壬午年七月十一日惟喬親王は出崩  
 わりて山林の里小野小町が娘小とあり別殿は櫻屋すりく小町が  
 昼夜平の相人に申すとすけり小町が歌はる事ありと和泉  
 苑よりわけて雨乞の勅令は詔り後四位は叙せられ唐は惟喬親王  
 の事代賜り名歌をりつて天下の早魁とすけり清和天皇の御  
 平合は水色の薄とつる水影をまりて御會は歌さけるに歌の  
 たむら山崎守大伴黒主あてありける和治小町が相子よけ  
 乃ぶらをうきへ婦女は福をえふりて小町が福音をめとすや  
 うげう家の百葉集にわくしに書入御會の席ひて小町が  
 歌を古歌ありとさるけりは小町歌とよりわくしはすかに百  
 葉集あはれしむは雲色の彩をりつて奏すはは  
 らふおのてわくしは書入小町が歌を一字もあはれ  
 後けりあはれしむは奥のわくしはふりて其日の御會はすり  
 悪うら面見はうしあはれはすはるそはは逆電せりとあ

三書本合卷



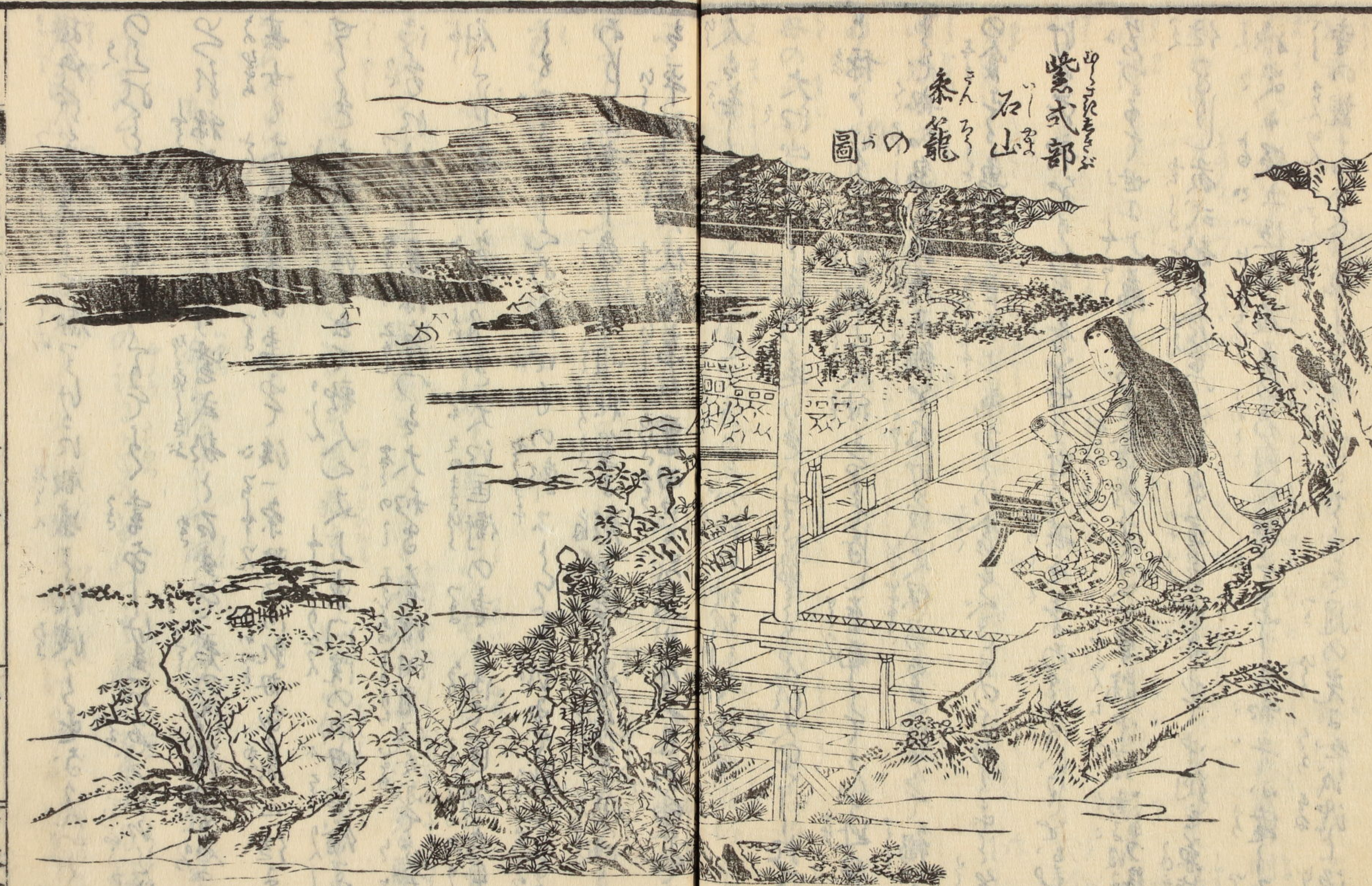
小式部内侍  
録歌の圖





幼雅より七十余輩といふまで御道の名を授けしむるは又  
 人五十八代後一條院長元の頃丹後守平井保昌は丹後の國をか  
 さめける其室和泉式部と云て元和泉守權房の妻とて上東  
 門院一條院后の女房を侍しまの女とて和泉式部と云て世に  
 子ゆへ乎人なり其子も又上東門院に侍りて小式部と  
 稱し其母後平井保昌の娘とて夫婦を丹別に侍りけり  
 時娘小式部と稱す其の儀小御りなり折々内裏に當たりし會  
 わりて召れけりは後上人小式部が年もゆを新くむてか  
 母の式部がもみてけりしと小式部と大納言と何々の息あり中納  
 言定頼は局の方に侍りて乎と云ふとせぬ丹後の女のみやと  
 人を譽しけりやと戲きて云ふは絶の神代といふあり

大江出づの地乃遠けきまづぬも又び夫のこゝたて  
 と稱しゆふを善殿上人社ありて善殿とていひ近き  
 とを和泉式部は又稱を好けり後史保昌ありて稱すま  
 の食とて魚なり官女と稱すの食とてさりの小ありてと名れ  
 けまが称をりて善とせりなり其を善とあまのいひせむと  
 名づもて世に上福とらも食ひゆや又一條院中宮彰子は  
 けまじ後式部と名を侍りて後史保昌の妻あり中納言兼輔の  
 孫あり後五位下後史保昌の孫ありて和乎小達と石山  
 寺の親も(和泉守)とて關山とてその月の光よ公城院源氏



紫式部  
石山  
泰龍  
の  
圖

三國姓傳口篇卷之五

三國姓傳口篇卷之五

八

七

三國姓傳

三國姓傳

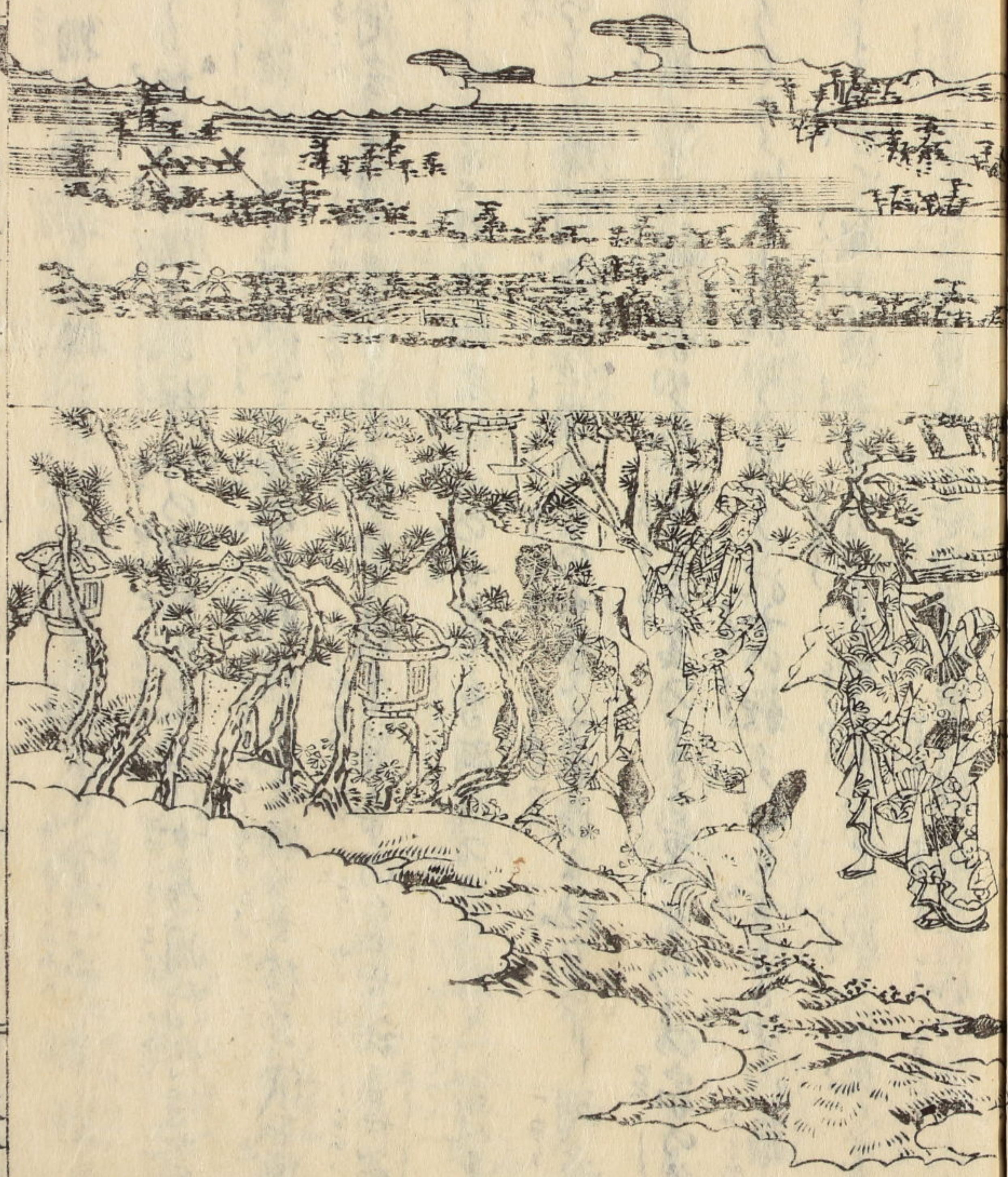
相傳紙の御集して獻了けに敬感に浅くもせあらんづくは家  
のよれを紙一紙よとてりてり書あけまぶ色のうみと世と  
とれ祿をとりをり崇式部と百もそ君の清用いも厚り  
其女も大貳成章の妻ゆて後一条院の内乳母なるか之位は叙  
すも大貳三位とて歌人之又上東門院の内母后倫子乃  
は方に依り赤深を侍つる大和守赤深御用の女ゆて又赤鳥  
尉より也る名を唱まて大江匡衡の妻と成て匡衡赤鳥  
もはこれにあり侍り方の郭もとて西歌ゆて歌をむらうと  
ありは女帝が愛して唯秋蓋は影を隠し洛外に遊回し小  
を平野南に伏見とある粟田口にありたりもおもむくは狗

ぶうがけし紙もなるとま絶ざる時ゆて南へより東山は月  
のうし物ゆきを公ようと是と和守の清神のまあめは  
方を尋してかくあん  
少のこころもふと紙あてきけ月のお入るよこしを  
あれ又秀造ゆて敬感せりける其後一子大江孝圓和  
泉もゆて後西のゆをいりて後病きりけふは仁吉のまきり  
あかりとゆいあらば  
かくもしり行の命もゆりて相らこころれんとて御りき  
とよみて帯に書みの社よすりあらばと秋のまよ白雲の  
光もついで帯に書みとてりてり病愈けりともはし年源

三國姓外傳中卷之五

十

書林

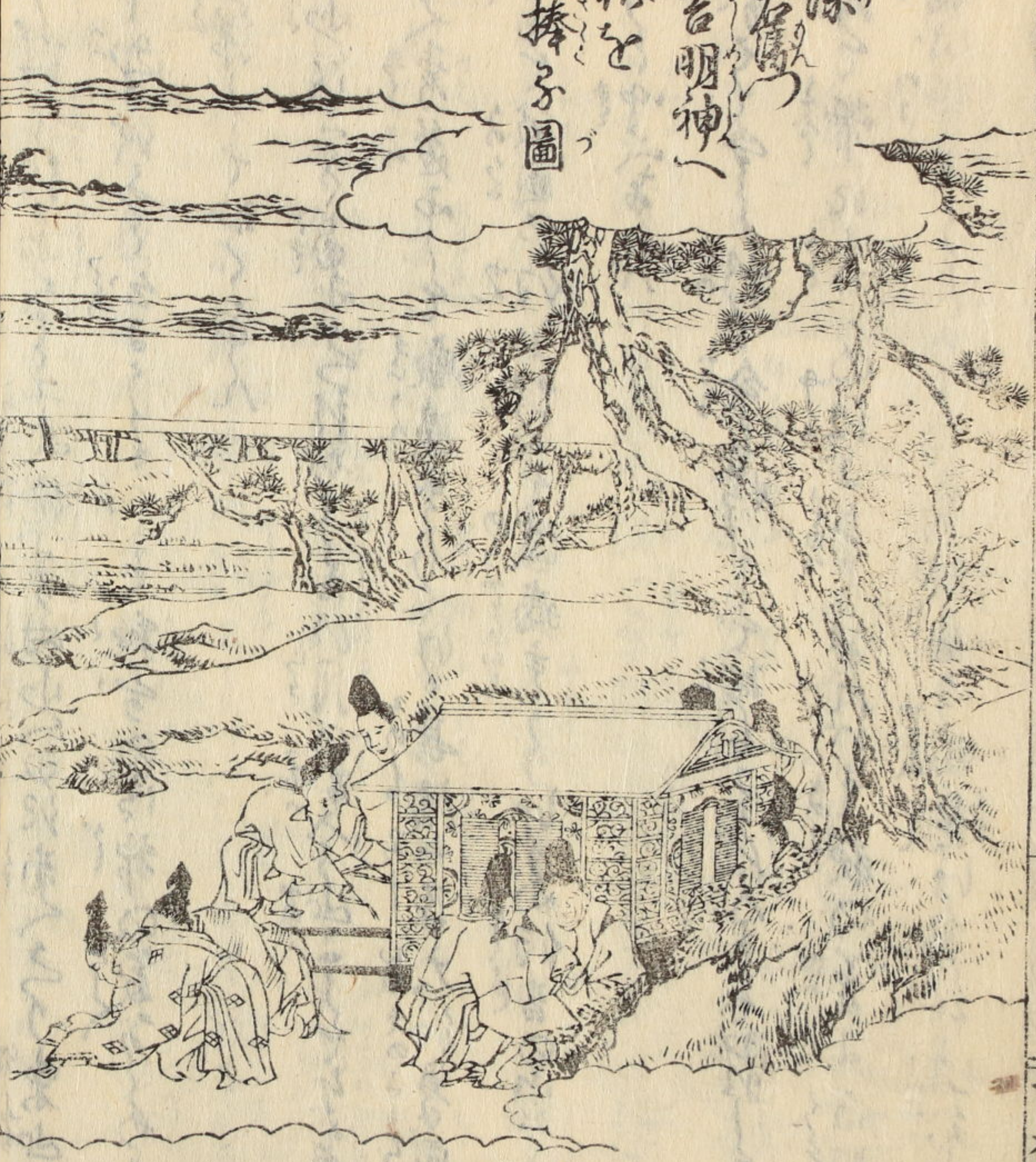


赤深  
 在  
 任吉明神  
 歌を  
 捧子圖

三國姓外傳中卷之五

九

書林



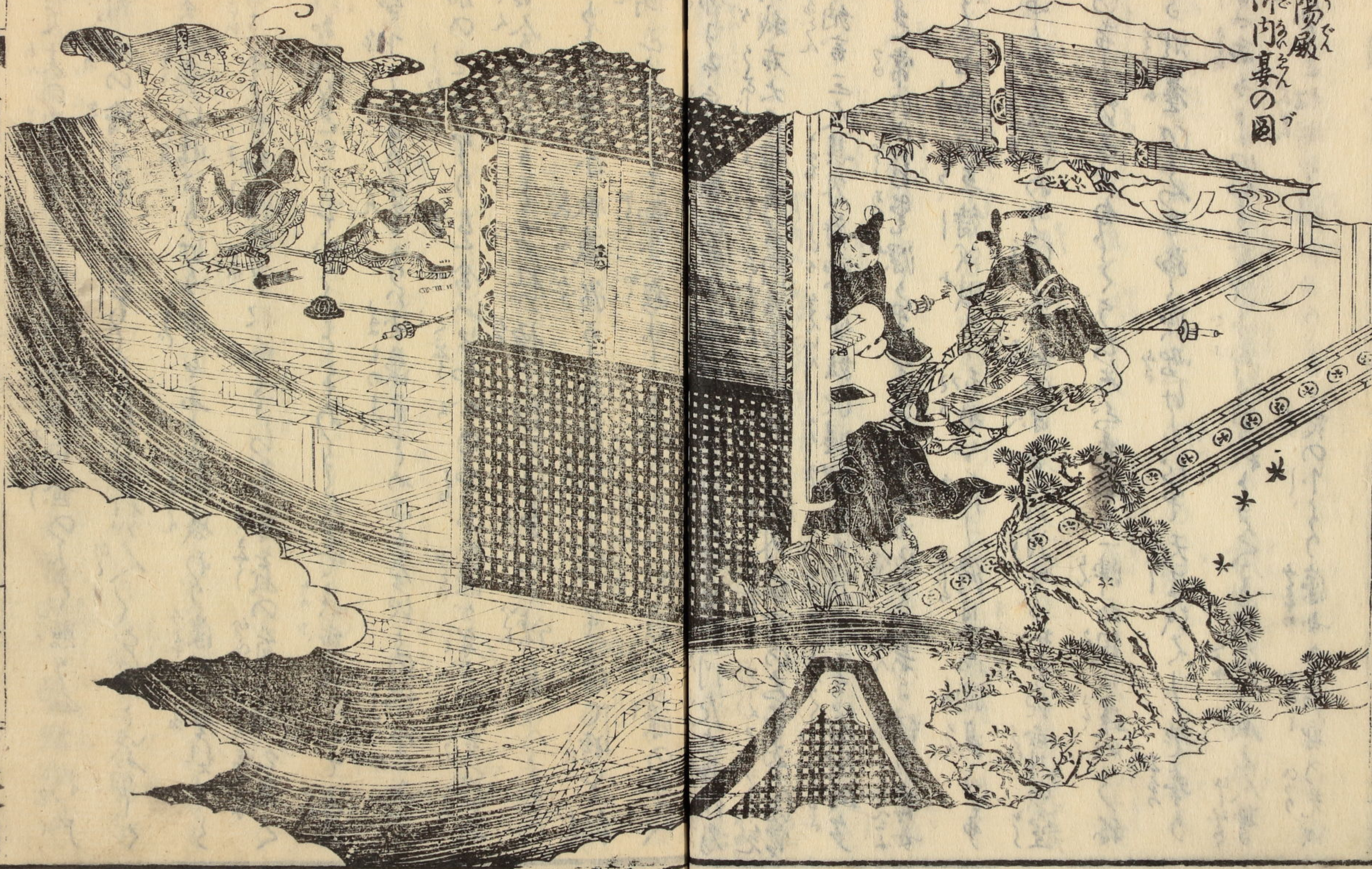
頼光相良の由女相模も大江山賢の妻あり入道一品の宮の女房  
あつて相模。周防も平隆仲の女後冷泉院の女房周防内侍宗之  
大中臣能宣の孫女は伊勢守補源文輔の女松平氏と相  
源少純を記伊守も平隆仲の妹也後朱雀帝の白皇女祐子内親  
皇に侍記伊守神後伯房仲の女也多相院の后侍賢門院より  
仕まつて堀河源三位頼政の女也二条院は仕まつり頼政の  
子記頼政の女も限もなればその名のよき事いそれの家集  
よゆりてうりりひかしのとくれ女の御もむもなる中に藤女  
の地より出で殿上に更り切しともなる人又頼政の女も  
高麗麻は藤女身より先と教養安徳孝親 易乃の女也宛

鳥羽院御位ゆつせもひ天仁の年号三年して改元あり  
元庚寅年より同日年己丑月朔日帝は元服すりて攝政忠実公  
頼朝大政大臣とて其後永久己未年四月廿八日忠實公を引白小  
任せしむ聖主賢臣の治教休明中て海内至歳を壽きとす  
御に當河原女も秋長一十七歳小もなりけれは花乃か人を  
窈窕とて雲のびんづ蟬娟より春の月朗ある夜乃極曉の  
芙蓉夕露の海棠も乃ぶる花小わびとて轉る事  
新道系作よりそのりの業もてむいひとてあつて  
ておとくをば後宮のき人とて一ツの若小帝殿を  
うりて宮殿小をなしては御異の世かていひはくは連理乃

酒膳を濃くして朝廷よのそまのひ深く宮中よあつて姫酒  
小長ちひなのひもあをあを百官ひやくくわん肩かたひひををてて機輪はり紡紡くくりり時とき下した  
年とし迄いたてたええ永なが三さん庚けい子し年ねん三月さんげつ三日さんじつ例年れいねんの内うち規ぎ式しきををてて桃もも花はな乃なり  
内うち裏うら曲まが水みづのの裏うら臥ふしてして移うつりりててのの取と去き年ねん八月はつげつ廿にじゅう八はち日にち白しろ皇こう后こう  
大納言おほののりごん三人さんじん其その外ほか侍しやく新あらた管かん絃げんにに堪た能のなるなる月つき郷きやう雲うん宮みやをを修あや多た  
めめはは常つねにに内うち裏うらをを深ふかくく申まをけけはは藤ふじ女をもも出でてて内うち裏うらをを侍しやくりり官くわん女を  
わわははるる内うち敵たかにに立た待まち候けう賊ぞく一いつ和わ新あらたをを舞ま下した終はつ日にちのの内うち酒さけ裏うらをを申まを  
ああいい中ちゆうをを後あと後ごははりりいい秋あきのの末すえををれれ月つき生なむむかかをを紀き骨こつのの空そら  
雲うみのの帝ていにに記きささをを申まをぐぐくくうう志しををままかか一いつ陣じんのの風かぜをを建たつつりり給たま  
ききるる熊くま養やうひひもも幼こくく成なりけけ一いつ日にち天子てんし派はええとと申まを奉ほうりり  
皇こう子し后こう中ちゆうににおおももははりり候けうももそれそれとと申まをぐぐくく申まを候けう上かみ人ひと誓ちかま  
てて声こゑぐぐはは松まつ明あきらららくく申まを候けうももああのの御ごのの下したよりより藤ふじ女ををを其その身みのの光ひかり候けう

式しきのの洋やう儀ぎをを申まを候けうららくくててののちちをを陽やう殿でんににおおかかへへてて内うち裏うらのの内うち裏うらをを申まを候けう一いつ日にち其その甚しき  
以も席せきをを申まを候けう子し孫そんにに親おや王わう后こう璋ちやう子し國こく白しろ忠ちゆう實じつをを申まを候けう大おほ后こう侍しやく房ぼう  
久く我が右みぎ大おほ后こう雅みやび實じつをを申まを候けう大おほ后こう忠ちゆう通つうをを申まを候けう其その外ほか前まへ官くわんのの大おほ后こうああ人ひと内うち裏うら  
のの大おほ納のり言ごん三さん人にん其その外ほか侍しやく新あらた管かん絃げんにに堪た能のなるなる月つき郷きやう雲うん宮みやをを修あや多た  
めめはは常つねにに内うち裏うらをを深ふかくく申まをけけはは藤ふじ女をもも出でてて内うち裏うらをを侍しやくりり官くわん女を  
わわははるる内うち敵たかにに立た待まち候けう賊ぞく一いつ和わ新あらたをを舞ま下した終はつ日にちのの内うち酒さけ裏うらをを申まを  
ああいい中ちゆうをを後あと後ごははりりいい秋あきのの末すえををれれ月つき生なむむかかをを紀き骨こつのの空そら  
雲うみのの帝ていにに記きささをを申まをぐぐくくうう志しををままかか一いつ陣じんのの風かぜをを建たつつりり給たま  
ききるる熊くま養やうひひもも幼こくく成なりけけ一いつ日にち天子てんし派はええとと申まを奉ほうりり  
皇こう子し后こう中ちゆうににおおももははりり候けうももそれそれとと申まをぐぐくく申まを候けう上かみ人ひと誓ちかま  
てて声こゑぐぐはは松まつ明あきらららくく申まを候けうももああのの御ごのの下したよりより藤ふじ女ををを其その身みのの光ひかり候けう

高陽殿  
御内裏の圖



二國女侍傳中巻

十三

高陽殿

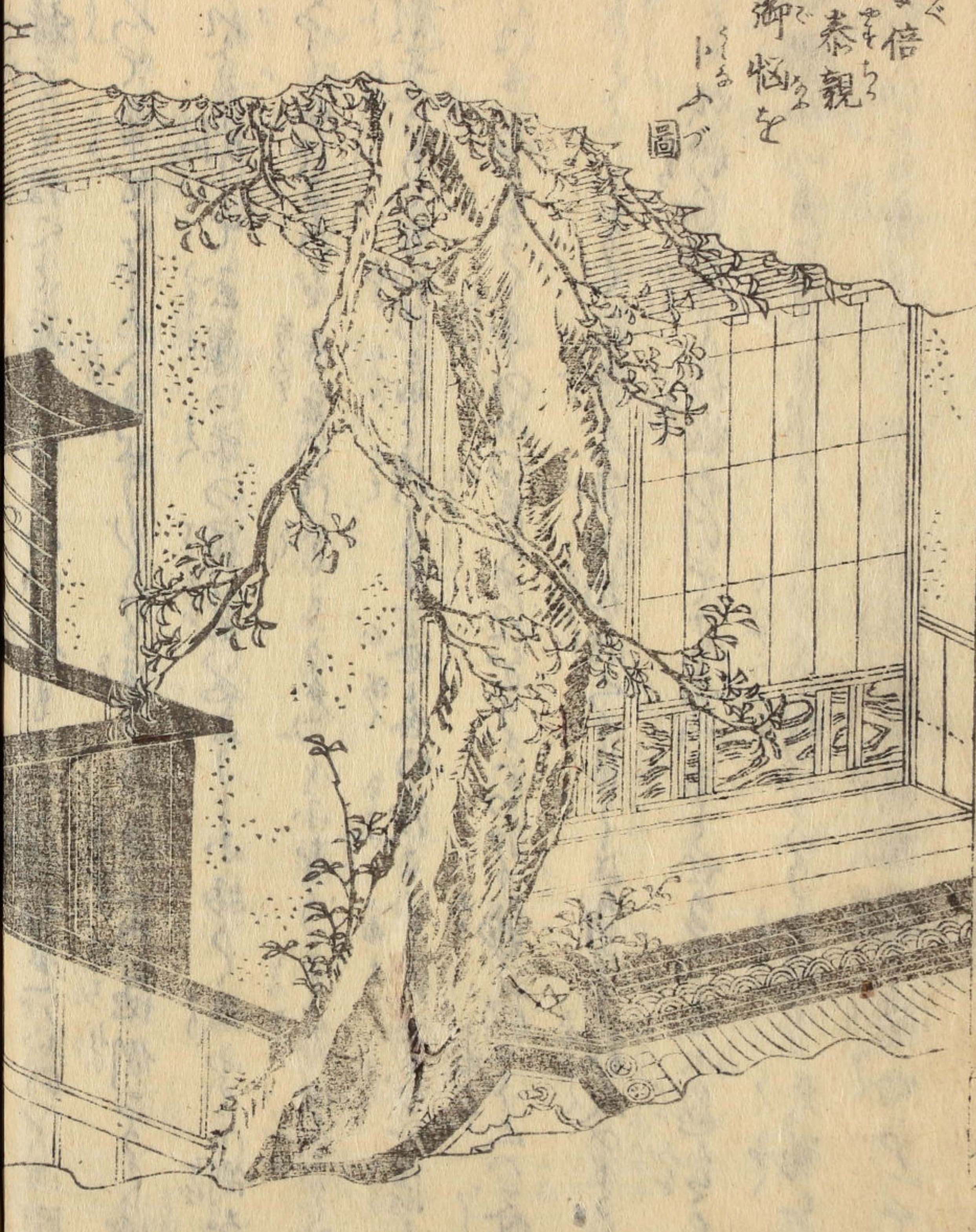
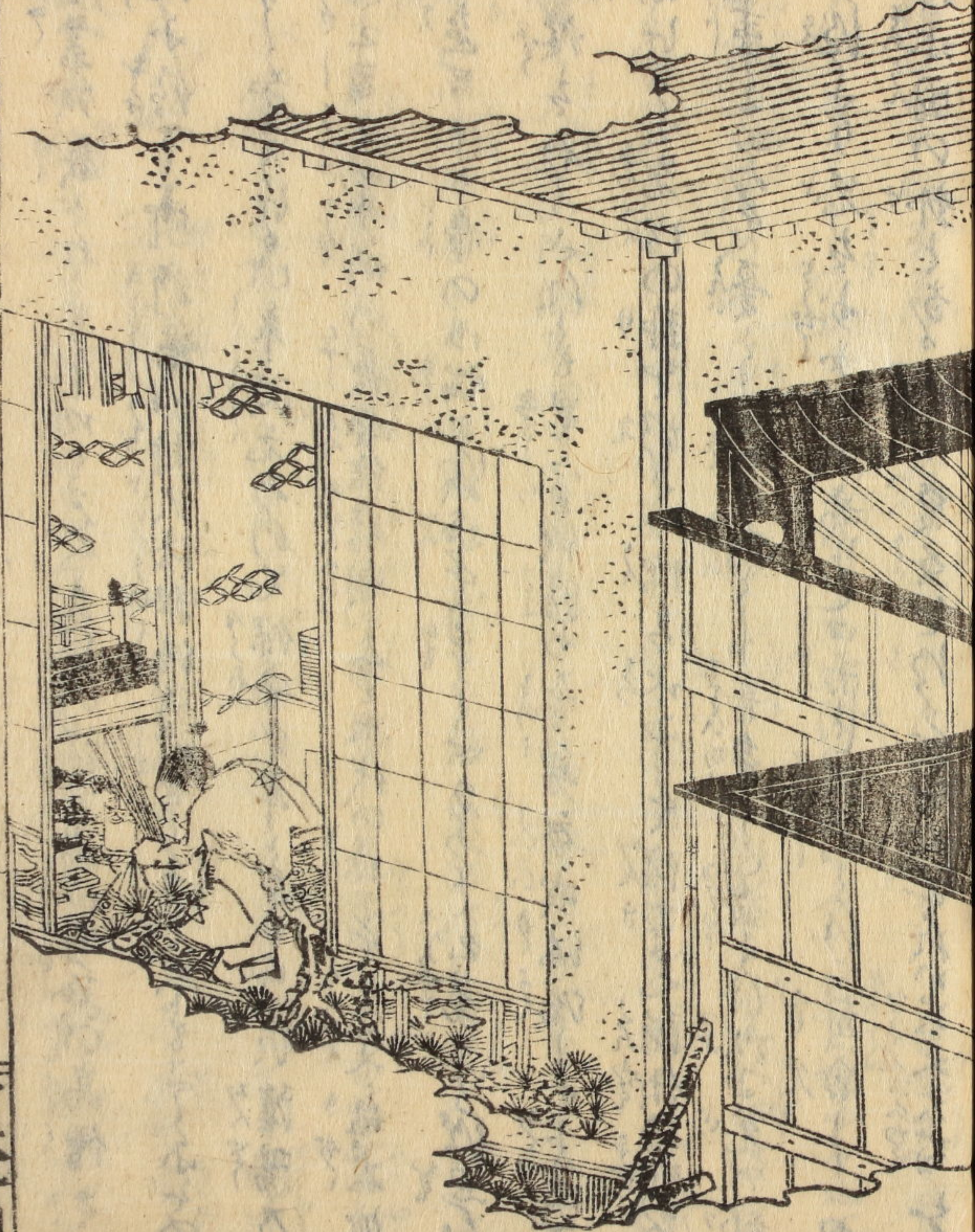
二國女侍傳中巻

十三

高陽殿

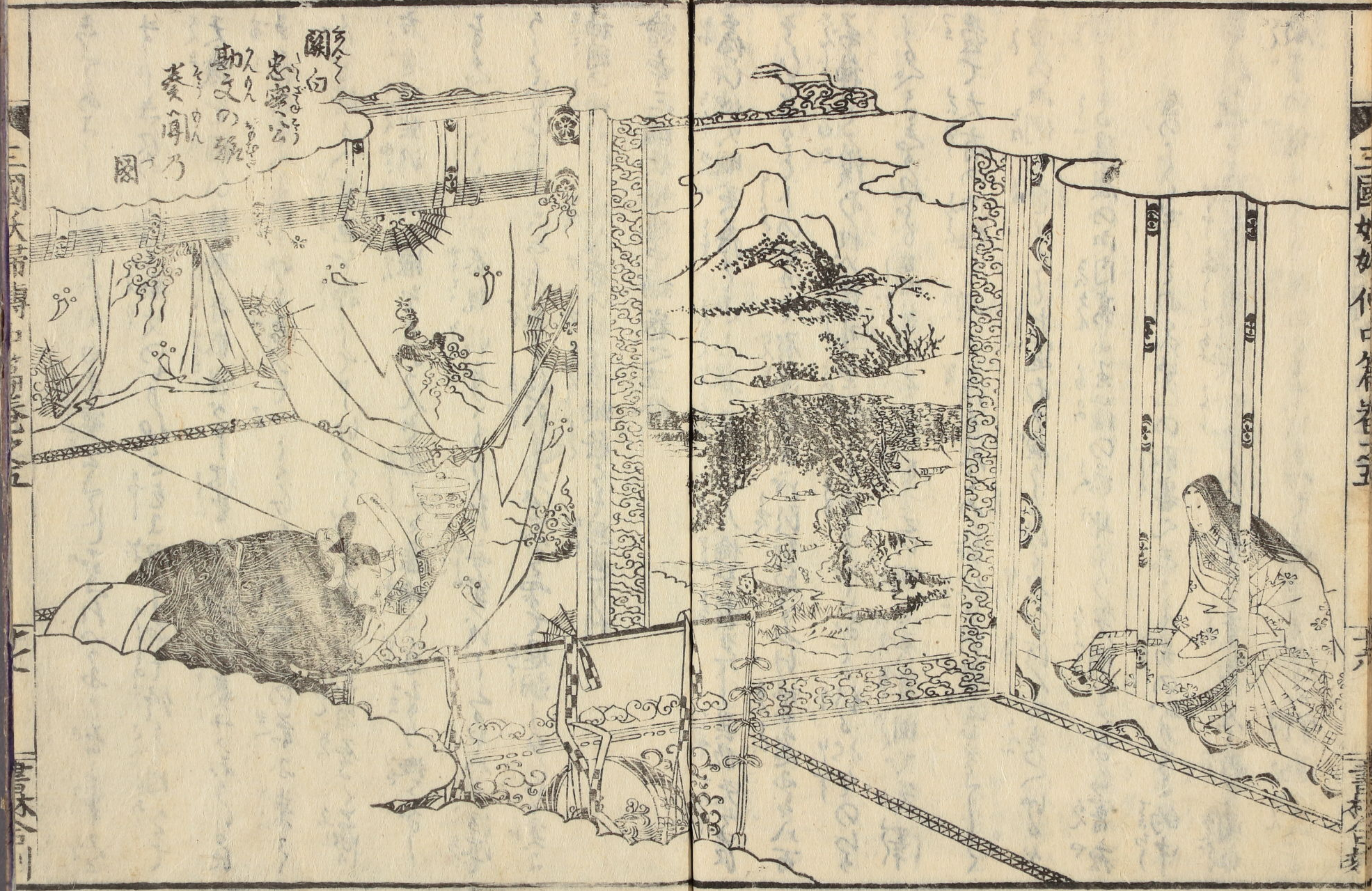






安倍  
 泰親  
 御悩を  
 圖





關白  
忠實公  
斯人の教  
奏聞  
圖乃

三國女如伊口有老一五

三國女如伊口有老一五

三國女如伊口有老一五

三國女如伊口有老一五

まつてめしつしけきわ面白忠實なまじしをれいふもなる事なり  
 すとまじわつてつと勅文のちりしをよ思し何そ候事内なるて  
 天機を伺ひ播磨守恭親がやり候事をつかされ奉りあつた  
 玉藻のまへにのけり思ひて一しつかり忠實公の弟小素  
 子と許しき色を揃てやけりいづる事いれ恩厚く候  
 右迎の監り候へ候なりいんをまじしを兼略に存なり候事  
 なるべしといふあはれい恭親情なりもつれに母家候しつとわと涙  
 うつしけり殿下よまじし候事候なりあはれなる事候て退朝しあはれ  
 神國の地ありて安倍家のゆき候事候なり思はれり  
 繪本三國女傳中編卷之五終

